



TITLE:

マックス・ウェーバーと十九世紀 の方法的意識

AUTHOR(S):

出口, 勇藏

CITATION:

出口, 勇藏. マックス・ウェーバーと十九世紀の方法的意識. 経済論叢
1940, 50(4): 504-522

ISSUE DATE:

1940-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/131370>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第卷十五第

月四年五十和昭

論叢

乘數の問題

文學博士 高田保馬

支那の永小作制度

經濟學博士 八木芳之助

時論

物價對策

法學博士 神戸正雄

戰時物價對策の再出發

經濟學博士 谷口吉彦

研究

江戸時代の經濟政策

經濟學士 堀江保藏

期間分析と均衡概念

經濟學士 青山秀夫

マックス・ウェバーと十九世紀の方法的意識

經濟學士 出口勇藏

說苑

一九三九年の銀需給

經濟學士 徳永清行

東西經濟思想の相似性

經濟學士 穂積文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

マックス・ウェーバーと十九世紀の方法的意識

出口 勇 藏

一 方法論史の研究の意義

マックス・ウェーバーの方法論が今日再び新しく深く省みられねばならないと私は先に主張した¹⁾。彼の與へた解決にたいして批判や修正が加へられはじめて以來、相當の年月が経過した現在、改めてこゝに彼の方法論を取り上げることは、經濟學の方法論の歴史をわきまへる一つの研究課程として以上には意味のないしわざだと人は云ふかも知れない。既に古典的とも云ふべき此方法論から全然獨立に、新しい方法論の樹立とそれにもとづきつつ世界經濟のただ中に投げこまれてゐる國民經濟の行手に經濟生活の未來の姿を描き出し、その東亞に於ける實現に向つて幕進する方策を論究することこそ現在の吾々の緊急の責務ではないか、と私を咎めあるひは嘲笑する人もあるかも知れない。しかし私は現在吾々に課せられてゐる任務を正に自覺するがゆゑに、上の主張を掲げたのであつた。それは何故であるか。一言にして云ふならば、ウェーバーが取組んだ問題が唯々彼だけのまた彼の時代だけの問題であるのではなく、社會科學の基礎理論に注目するすべての此科學の研究者に向つて恒に解決を迫るところの問題であると云ふ事情である。即ち吾々が現在ウェーバーを省みるのは彼の提出してゐる問題の重要性のためであつて、彼の遂げた解決それ自體のためではない。社會科學的認識の客觀性の問題、社會科學に

1) 拙稿「マックス・ウェーバーの初期の研究」(本誌昭和十四年五月號)。

於ける歴史・理論・政策の三つの立言部門の聯關の根柢的把握——現代に生きる誠實なる研究者にして、時代が課する經濟學の内容へ強い關心をそゝのかされると共に、否深い關心を寄せれば寄せるほど、此問題について眞劍なる自省を持たせられない者があるであらうか。ウェーバーが彼の置かれた學問的情況の下にあつてこの一般原理的な問題と取組んだと云ふこと、こゝに彼の方法論者としての面目があり、又このことが端的に吾々の研究をうながすのである。ウェーバーは此問題に——彼みづからの表現を藉りれば「文化生活的諸科學一般の領域には『客觀的に妥當な眞理』が如何なる意味に於いて存在するの²⁾か」に——直面し、そして彼の時代に即してそれを「理想型理論」と「沒價值性理論」とによつて解決した。私はさきにこの二つの理論が相互に離すべからざる關係によつて結びつけられてゐることを、主として「沒價值性理論」の側からの分析によつて明かにし、此理論が越えらるべき道は「理想型理論」の側からの分析を待たねばならないことを示した。³⁾今こゝに「理想型理論」を表題^{*}に掲げて若干の考察を試みようとするのは、先に述べたところを補完しつゝ、ウェーバーとともに吾々も亦現代的な形で解決にたづさはるべき問題の解かれうべき方向を尋ねたいと思ふからである。

先づ注意しておかなくてはならぬことは、吾々がウェーバー的解決——ウェーバーの問題ではない——に對して如何なる態度で臨むかと云ふことである。「理想型理論」のもつ種々の難點を救ふための研究に吾々は事缺かない。それに對して加へられた諸々の修正をも私は知らぬではない。けれども私がこゝろざす批判の方向は、理想型の意味を銘々の持つ立場と關心とから様々に變容したり延長したりすることにあるのではなくして（それはドグマの闡陳であつて、方法論的研究の名にあたひしない）、理想型と云ふ概念を生み出したウェーバーの方法的意識に遡つ

2) M. Weber: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre (以下に於いては WL.) s. 147.

3) 前掲拙稿および「沒價值性理論の成立」(本誌昭和十四年七月號)。
* 本稿末尾の附記を參照。

て、その意識と吾々の方法的意識とを對質させること、而してそれによつて——奇妙にも聞えようが——彼から學びつゝ吾々の方法的意識を深めることにある。方法的研究は方法論の概念を概念として批判し修正することにあるのではなく、その概念を通してそれを生んだ方法的意識あるひは自覺に潛入して、吾々のそれとの共通の意識面の上で問題の取り上げ方を談り合ひ、而して吾々の方法的自覺によつて相手を理解し更に一層高次の自覺を獲得して相手の立場を包攝することではなければならないであらう。それは方法論と云ふものが學問的自覺に於いて生ずるものであるからであり、立場と概念構成とに於いては多様な姿を呈する方法論が共通な客觀的な議論の場所を持ちうるすれば、それは正しく方法的自覺の面でなければならぬだらうからである。時間的場所的な制限を持つ方法論は自覺面に於いて單一の地盤に出會ふ。ゆゑにそこで廣まりと深まりとに於いて他を凌ぐ自覺は他を包み越えることが出来るのである。而して若し相手を越える自覺が獲得されたとするならば、唯々相手の立場を排斥するのではなく、逆に相手の自覺面をみづからの内部に包み生かしてその占むべき場所を指示することが出来る筈である。この意味に於いて、方法論の歴史は方法的自覺の遍歴・深化の歴史に外ならず、方法論史の研究は新しい自覺、方法的立場の獲得をめざすのである、と云はねばならぬ。新しい自覺に立ち、現實の經濟生活を見つめることによつて論理的に導き出される概念、——これが形の上では或はつながりを持たぬやうに考へられることがあらうとも實質的には以前の方法論の概念の總和として、以前の概念に代つて經濟學の内容をして一層豊富にし現實の要望に答へしめるべき新しい方法論的概念であるであらう。この意味に於いて經濟學の發展もまた所謂「非連續の連續」としてのみ望みえられると云はれよう。

この觀點から「理想型理論」はこゝに取り上げられ、且つそれを超克する道を切り開くべく意圖される。

二 唯物史觀とウェーバーの方法論

ウェーバーの方法論が西南學派の哲學と離しては考へられないことは今更述べるまでもない。ウェーバーはトレルチュの言を借りれば「私を屢々訝からせたほど嚴密に新カント主義の此學派に結びついてゐたが、又獨自の注目すべき思想を此學派に供給したのである。」⁴⁾しかしこの自明性にも拘らず、吾々には彼の方法論はさ程容易に理解せられない。方法論的研究を遺したばかりではなく、その方法論に基いて數多くのまだ獨創的な勞作を多方面に亘つて吾々に遺したウェーバーに對してこの言葉を提出することは、あるひは不審を招きあるひはかく云ふ私の理解力の貧困が笑はれるかも知れない。けれども實際に於いてかく云はねばならないのではないかと思はれる。而してその理由として私は彼の個性に基く彼の方法論的研究の特異性を挙げたいのである。

ウェーバーの勞作についてはすべての分野に於ける斷片的性格が擧げられる⁵⁾。その根據は彼の病弱や急逝と云ふやうな外面的な事情から説明さるべきではなくして、深く彼の本質に屬してゐた。彼は「限りのない即事性(Geschehen)」を以てそれぞれの研究領域に深く潛入しつゝ、而も飽くまで經驗科學者とし特殊研究者として終始しようとし、哲學者たることを厳しく拒んだ。「哲學のことは自分にはわからない」と云ふのが彼の口癖であつた。⁶⁾方法論的研究に於いても亦、經驗科學者の限度を越えまいとする彼の潔癖は極端な迄に示されてゐる。人たとへば實踐的評價の規範的威嚴が論ぜられる場合に、彼が價值哲學の問題と經驗科學の方法論の問題とを單に

4) E. Troeltsch: Max Weber (Deutscher Geist u. Westeuropa S. 249).
5) K. Jaspers: Max Weber, Gedenkrede SS. 4 u. 14 ff.
6) Marianne Weber: Max Weber S. 335.

引離してただけでその間の方法的聯關を掲げようとするい箇所⁷⁾を見られるがよい。尤も吾々が感ずるこの不滿こそは彼の準據した「價值哲學」の特色から生ずべきものではないかと云ひえられはする。けれどもそれは同時に彼の方法論的研究の特異性からも生ずるのである。だから裏返して云へば彼が特殊研究者の限度を越えまいと努力したことが彼の哲學的見解を明瞭に理解することを妨げてゐる。その點について最も良く彼を理解すべきは彼のリッケルトが「ウェーバーは、彼の特殊科學の範圍を明かに越えてゐるやうな場合には、目立つて否定的に獨斷的 (dogmatic) な意見を述べてゐる。さう云ふ態度は外の場合には決して彼に見られぬことであつた。」⁸⁾と云つてゐる場合、こゝに云ふ「目立つて否定的に獨斷的意見」とはウェーバーの研究態度が齎す必然的な一つの歸結であると云ふべきであらう。彼が一面に於いて論理的に明晰に徹底して方法論を展開すればする程、その反面には——方法論をその時々の問題につき論客を向ふに廻して論戰の形で發表したと云ふこれまた彼の實踐的な資質から生じた獨特の仕方にもよるとは云へ——暗い陰翳が彼の方法論に附纏つてゐるのである。

吾々は先に方法論的研究に彼を驅つた三つの動機を指摘した。⁹⁾けれども吾々は彼の此研究の内容を特色づける今一つの重要な契機を述べなかつた。それは彼が自らの方法論の確立を以て唯物史觀に立つ經濟學の方法論に對抗させ、理論的に又實踐的に自らの立場を防衛しようとしたと云ふことである。ウェーバーの初期の研究が如何に當時の政治的情況と深い聯關を持つてゐたかは吾々の既に明かにしたところであつたが、更に廣く彼の一生に亘る研究について見ても、問題の取り上げ方が如何に政治的實踐的な立場から選ばれてゐるか云ふこともシュテーディンクによつて既に研究されてゐる。¹¹⁾方法論的研究も亦その一つの實例であるにすぎない。唯物史觀

7) WL. S. 463.

8) H. Rickert: Max Weber und seine Stellung zur Wissenschaft (Logos Bd. XV S. 234).

9) 前掲拙稿「沒價值性理論の成立」

10) 前掲拙稿「マックス・ウェーバーの初期の研究」。

は深く彼の若い心をとらへた。彼は後年に於いても『社會主義』についての講演(一九一九)のなかで、一八四九年の「宣言」を「一つの豫言的文獻」であるとして、次の様に述べてゐる。

「この文獻は——吾々はそれを決定的な諸テーゼに於いて否定する(少くともわたくしはさうする)けれども——その性質上第一流の學問的業績である。……この文獻には、吾々がここで否定する諸テーゼに於いてすら、聰明なる誤謬(ein geistvoller Irrtum)がある。それは政治的には大きなまた恐らくは決して好ましくない結果をば持ったけれども、しかし學問に對しては非常に豊富な成果を、愚鈍な正確さ(Geistlose Korrektheit)が屢々もたらすよりは實り多き成果を、齎した。」¹²⁾

かくこの豫言的文獻の學問的意義を承認することは、しかし、そのウェーバーに對する妥當性を承認することではなかつた。却つて寧ろそれに對立する理論を樹て理論的・實踐的にそれを積極的に克服しようとする意志が方法論の研究に與り働いてゐて、自らの方法論の確立によつて獲得された心の餘裕がかく云はしめえたのであると解せねばならぬ。方法論の研究と所謂資本主義の精神に關する研究とが研究の端初に於いて前後してゐると云ふ事實に、加之またこの二つの研究領域の勞作が、恰も一本の繩をなふ二本の藁がたがひちがひに前方に出て行くやうに、次々に交互に發表されてゐて、而してウェーバーの學問的生命が、かくしてなはれた繩によつてくりかためられるやうに、此等の勞作によつて確信を得つゝあつたと考へられる事實に、吾々は人々の注意を促したい。「註」又彼が一九〇五年四月にリッケルトに宛てゝ、近く公にさるべき『新敎の倫理と資本主義の精神』の第二部は「近代經濟の一種の『唯心論的』構成(spiritualistische Konstruktion)」であると書き送つてゐることをも、吾々は指摘したい。それは同書の第一部を發表してのち、彼がアメリカに旅行し見解を廣め自分の研究に對して更に確信を深めて故國に歸つてからしばらく経つてのことである。——そこで吾々は彼の方法論が唯物史觀とそ

- 11) Christoph Steding: Politik und Wissenschaft bei Max Weber (1932) 尤もここに書かれてゐる限りでは、結論は餘りに早急であり、また皮相であると云はれねばなるまい。
- 12) M. Weber: Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik SS. 504, 505.

れに據る經濟學の方法论との批判の意味をも持つてゐたことを知つておかなくてはならない。

〔註〕

ウェーバーが方法论の研究を開始したのは一九〇二年十月であり、資本主義の精神の研究は一九〇三年の後半から始められたと云はれてゐる。(Marianne Weber; *ibid.* SS. 272, 350.) またこの二つの研究の交互的な關係を知るために今前者に屬する勞作をAとし後者に屬するそれをBとするならば、それらの發表の順序は次の通りになつてゐる。——一九〇四年にはAが二つとBが一つ、一九〇五年にもAが二つとBが一つ、一九〇六年にはAが一つとBが一つ、……一九一七年にAが一つとBが一つ。詳しくはウェーバーの著作年表について見られたい。

三 經濟學に於ける自然主義と歴史主義

こゝで試みられるのは「理想型」概念の意味の説明ではない。吾々の先に述べた意圖に従つて、この概念構成を通してウェーバーが經濟學の認識の客觀性と云ふ一般的原理的な問題を如何なる方法の意識に立つて解いたかを見究めることにある。しかしそれに先立つて、彼が此問題を如何なる情況に於いて把握したかを吾々は問はなければならぬ。蓋し一般に問題の扱へ方が既にその解決の方向を約束してゐるものであるからである。ウェーバーは「客觀性」のはじめに「解決の提供ではなく問題の提示をしようと思ふ」と書いてゐるが、此言葉は新しく提出された研究分野に身を投じてゐる人の謙遜だけから發せられたのではなく、それ以上に原理的な意味を含蓄してゐるのである。

今『客觀性』からウェーバーの問題の扱へ方を抜きだして見よう。而してその際私はウェーバーと等しく歴史學派にそだてられ、精神科學の哲學的基礎づけによつて歴史學派のもつ難點を打開することを意圖したデイルタイ

13) Marianne Weber; *ibid.* S. 359.

14) WL. S. 148, (邦譯「社會科學方法论」—岩波文庫版—p. 10)。

から學びつゝ、ウェーバーの方法的意識を明瞭にさせたいと思ふ。云ふまでもなくウェーバーとデイルタイとの間には大きな差異がある。兩者が用ひる同じ概念、例へば *Verstehen*, *Typus* 等々の如きを直ちに等しなみに取扱ふことは決してゆるされない。それどころか兩者には著しい對立がある。それは後に觸れる機會を持つてあらうやうに、論理主義と心理主義との對立であると云ふことができよう。にも拘らず、兩者にはその對立を越えた共通の方法的意識が横つてゐることを吾々は見逃してはならないであらう。吾寧ろその對立はその共通な意識に個有なものから生ずるとも考へられるべきものであらう。その意識とは十九世紀の歴史的意識 (*das geschichtliche Bewusstsein des neunzehnten Jahrhunderts*) と名づけられてよいものである。このものの本質を論究することはこの節の問題ではない。吾々は以下に於いてウェーバーによる問題の歴史的な把握方を尋ね、而してそれがデイルタイの精神科學史の敘述から得られる此科學の方法的意識の遍歴を顧みることによつて一層包括的に理解されうるものであることを示すであらう。

A 經濟學に於ける自然主義

先づウェーバーは云ふ。

「恐らく政治史は例外であらうが、人類の文化制度や文化現象を對象としてゐるあらゆる科學と同様に、吾々の科學が歴史的には先づ實踐的な觀點から出發したと云ふことを、吾々は皆知つてゐる。國家の特定の經濟政策的方策についての價值判斷を生み出すことが、その科學の第一のまた差當つて唯一の目的であつた。……ところで周知の通り、この狀況は漸次に變化したとは云ふものの、『存在するもの』の認識と『存在すべきもの』の認識とを原理的に區別することは矢張り行はれなかつたのである。」¹⁵⁾

「國民經濟學は——吾々が既に見たやうに——元來少くともその論究の重點から見れば『技術』であつた。云ひ換へれば、それは現實の諸現象をば一つの、少くとも表面上は一義的な、固定した實踐的な價值觀點、即ち國民の『富』の増殖と云ふ觀點から觀察した。他の面ではそれは最初から單なる技術ではなかつた。なぜならそれは十八世紀の自然法的合理主義世界觀の強力な一體性のなかへ織りこまれてゐたから。けれども現實の理論的ならびに實踐的な合理化が可能であると樂觀的に信じたその世界觀の特性が本質的に作用を及ぼしたのは、自明なものとして前提されたその觀點の問題的な性格が発見される妨げになつたと云ふ點に於いてである。社會的現實の合理的なる觀察が自然科學の近代の發展と密接に結びついて成立したものであつたやうに、それは觀察方法のすべての點に於いて自然科學との近い關係から脱しなかつた。」¹⁶⁾

このウェーバーの引用句の意味をデイルタイに據つて一層明かならしめよう。デイルタイは近世の自然科學の方法的意識が社會的歴史的現實に適用され、社會を説明し指導することを課題として成立した十七・十八世紀の精神科學を一般に「精神科學の自然的體系 (das natürliche System)」と名づけた。¹⁷⁾ それは精神科學が形而上學的ならびに神學的なる構成を脱却してその獨立の中心——人間性——を発見し、それによつてそれぞれ一科の科學として成立し分化することができたところの近世ヨーロッパの光輝ある學問體系である。その共通の特徴は人間性を「抽象的な圖式」に於いて把へ、「人間に於ける因果聯關から社會現象を推論すること」であつた。¹⁸⁾ 經濟學に於いても最初に科學として結實したものが、あるものとしてであつたことは云ふまでもない。重農學派からアダムスミスに至る迄、經濟學は歴史に誇るその代表者を持つてゐる。そこでは「自然」は物的自然であるとともに又神の攝理を意味した。人間の本性である「自然的自由」は invisible hand に導かれて「自然的秩序」「自然的自由の制度」をおのづから形成すると理論的に認識された。彼等は未來の社會の形をそこに見たのである。そこで先のウェーバーの言葉で云へば、そこでは『存在するもの』と『存在すべきもの』とが直接に相合して區別されてゐなかつ

16) WL. S. 185 (同書 pp. 65, 66).

17) Dilthey: Ges. Schr. Bd. I S. 379 尙拙稿「デイルタイの歴史研究に於ける資本主義觀」(本誌第39卷第4號)參照。

18) ebenda. Anmerk.

たところの「自然主義的一元論」が支配してゐた。而して彼等が理論的に追求したのは現在の存在と未來的存在とのこの同一視に於ける「經濟生活の自然法則」であつた。

精神科學の自然的體系が因果認識の法則的聯關によつて齎した理念は「人類の連帶」と「人類の進歩」とであつた。¹⁹⁾前者によつて人は理性の自律・認識を媒介としての地球の支配・フマニテートによつて、權力闘争の眞唯中に於いても人類の連帶が可能であることを高揚した。これ所謂コスモポリティスムスの誕生である。他方に此體系の歴史的意識はこゝに云ふ人類が歴史と共に進歩すると云ふことであつた。吾々はその思想を廻つてパスカルの中に、而してモンテスキューに、ヴォルテールに、更にはテュルゴーに見ることが出来る。²⁰⁾此理念によつて貫かれた歴史敘述の一般的特色は因果認識であること、人間の行爲の動機を功利性によつて見ること、而して歴史を現在までの進歩の過程として把へること——一種の實用主義的歴史であると云ふ點である。歴史を「現在の成立に關する科學」(Wissenschaft von der Entstehung der Gegenwart)と定義したドイツの學者があつた。しかしこの歴史敘述が先づ實を結んだのはフランスでもなければドイツでもなくして、一六八八年以來政治の安定と驚異的な繁榮とを享受したイギリスに於いてであり、それを代表するのはヒューム・ギボン・ロバートソン・ファアガソン等の著作である。「このイギリスの歴史敘述は個別的なる力としての個人から、而かも個人の中で特に矢張り自利(Egoismus)から出發した。それは政治的生活をすべて此點から理解しようとした。指導的人格に於ける偉大なるもの、英雄的なるものも亦、その歴史にとつてはこの動機から發生する。その當時經濟生活の説明を支配したのとそれは同一の假定である」とデイルタイは書いてゐる。²¹⁾ところでアダム・スミスがヒュームの親友で

19) Dilthey: ibid. SS. 380, 381; Ges. Sch. Bd. III S. 223 ff.

20) 我國の文獻では、田邊壽利「フランス社會學史」；馬場啓之助「歴史意識」参照。

21) Dilthey: Ges. Sch. III. S. 246.

あり、フーガソンとも交渉のあつたことは彼の傳記を読んだ人には既に明かであらう。實に吾々は『諸國民の富』の第三篇に於いて經濟學に於けるこの當時の歴史的意識を知る好箇の文獻を持つてゐるのである。歴史に對する此體系の方法的意識を知るために、簡単な分析を此文獻に加へるであらう。

スミスが第三篇の劈頭において語るのは「人間の自然的性向」(natural inclinations of man)によつて促進される筈であるところの「繁榮の自然的進歩」(the natural progress of opulence)である。²²⁾之は歴史的經過そのものの中からみちびきだされた發展の順序ではなく、人間の心理的事實より歴史と關はりなく演繹せられたところの「自然的順序」(the natural course of things)である。普通の云ひ表し方に從つて自然と歴史とを對立させるならば、この順序は非歴史的なる歴史の順序であると云はねばならぬ。スミスは此自然的秩序を基準として過去の歴史を裁いてゆく。ローマ帝國崩壊後のヨーロッパの世界に於ける農業の衰退を語り、次いで都市の發達を述べるのは、最後の章に於いて都市の商業が「自然的順序」に基いて如何に衰微した農村の改良に貢獻したか、即ち此順序に從ふことによつて社會は如何に現在まで進歩したかと云ふ事を説く前提であつて、それが内容的に歴史觀の中に這入りこんでゐるのではない。即ち、この歴史敘述は「徹頭徹底唯々自己自身を唯々自らの現在のみを理解する」²³⁾而して過去からの進歩の尖端としての現在の社會の理論的分析に經濟學の主要課題があることを更によく認識せしめようとする吟味に役立つのである。過去をそれ／＼個々の價值に於いて理解しようとする十九世紀の歴史的意識とは全く異つた意識に於いて、こゝでは過去的存在と現在的存在とが直接に結びついてゐる。

かくの如く、自然的體系あるひは自然主義に於いては過去的存在と現在的存在と未來的存在とが「自然」によつ

22) Cf. A. Smith: The Wealth of Nations, Book. III.

23) Dilthey: ebenda.

て云はゞ直接的に統一されてゐた。而してその統一を可能ならしめたものは實に歴史的世界の中から市民社會のイデーを先取して之の實現を意慾する實踐的現在の自己意識に他ならないのである。

世紀は移つた。而して上記の方法的意識は英佛とドイツとに於いて重大なる對立を生んだ。自然主義への狂信から生じた抽象的な方法的意識と歴史主義の意識との對立がそれである。

イギリスとフランスとに於いては自然的體系の偉大なる先縱の洞見によつて經濟的實在は彼等の意慾に従つて進歩した。彼等のイデーは現實化された。而して市民社會のこの成熟、安定は、他方に於いて、資本主義經濟機構の科學的分析を發展せしめた。だが恰もこゝに經濟學の方法的意識は或變質を受けたのである。人々の前には彼等の偉大なる先達が實踐的に意慾したところのイデーが日常的現實として實在界に落ち來つて存在し、つくらるべきものがつくられて既に與へられたものとなつて現れてゐる。ゆゑに經濟學の任務はこの與へられた實在界をば、それが實踐的につくり出されたるものであることを深く顧慮することなくして、解釋することに置かれた。今や理論の對象は實現することを要求するイデーではなくして日常經驗の事實であり、歴史的な邇及によつてその存在の事實を確かめられることを要しなくなつた。又政策は此實在界をつくられてある社會の形——資本主義的社會——の埒の中で理論に一致せよとするとところに成り立つ。歴史は理論にとつて不必要であり、政策も亦獨立の領域として經濟學の思惟の中には這入らない。歴史と理論と政策とは聯關なくして放置せられ、唯々與へられた實在界の機構を因果的に説明することのみに經濟學の課題はある。こゝに於いて歴史的空間的な地盤を離れることによつて超歴史的超空間的であることを要求する抽象的なコスモポリティスムスが經濟學を支

配した。吾々はこの方法的意識に立つ經濟學を一般に、「抽象學派」(die abstrakte Schule)と呼ぼう。マンチエスター學派がこれを代表してゐることはことわるまでもないであらう。

B 經濟學に於ける歴史主義

他方、自然的體系に於ける自然主義はドイツに於いて有力なるその對立物を、歴史主義 (Historismus) を生んだ。このものは自然的體系に於ける上述の方法的意識が批判されることによつて成立した。人類の進歩と云ふ理念はドイツにも啓蒙期に齎されたものの、それに對する疑惑は既に早くユストゥス・モエーゼル (Justus Moser) によつて社會思想の上で、ヴィンケルマン (Winckelmann) によつて文化史の上で唱へられてゐたが、フランス革命の混亂とそれに續くナポレオンの蹂躪とを契機として、此歴史的意識は廣くまた深く批判され初めた。抽象的な人類性の代りに國民が、ひたむきな進歩の代りに發展が歴史社會の概念として登場した。此偉大な思想の轉換をば詳しく傳へることは今の吾々の目的ではない。浪漫主義、ヘーゲルの哲學、歴史法學派、ニープールから始るドイツ歴史學の勃興——人々は之等の思想の内に歴史的意識の此轉換を読み取らなくてはならない。さうして經濟學はと云へば、歴史法學の影響の下に成立したドイツ歴史學派がこれらと並んで十九世紀の歴史的意識の表現として數へ入れられねばならないのである。

ところでウェーバーは先の引用によつてこゝに成立した方法的意識に就いて書いてゐる。

「更に歴史的精神 (historischer Sinn) の覺醒にともなつて、倫理的進化論と歴史の相對主義との結合が吾々の科學を支配するに至つた。このものは、倫理的規範からその形式的な性格を剥ぎ取り、文化價值の全體を『倫理』の領域に入り込ませることによつて倫理を内容的に規定し、かくして國民經濟學をば經驗的基礎に立つ『倫理的科學』と云ふ威嚴にまで高めようと企てた。あり

とあらゆる文化理想が「倫理」の刻印をそなへることによつて、倫理的命法に特有なる威嚴は消滅し、しかもそれらの諸理想の妥當の「客観性」のためには毫も得るところがなかつたのである。²⁴⁾

「自然主義的」元論のこの狂信的なる風潮が経済的諸學科に及ぼした強力なる反應をここで跡づけることは不可能である。社會主義的批判と歴史家の仕事とが本來の價值觀點を問題にしはじめた時、一方には生物學の研究の力強い發展が、他方にはヘーゲルの汎論理主義の影響が、概念と現實との關係を全幅的に明瞭に認識することを妨げた。吾々にここで關係のある限りに於いてのその結果はかうである——フイヒテ以後のドイツ觀念論の哲學、ドイツ歴史法學派の業績、さうしてドイツ歴史學派經濟學の勞作は自然主義的ドグマの侵入に對して強大なる堰堤を築き上げたにも拘らず、今だにまた一部にはかかる勞作の結果として、自然主義の觀點は決定的な諸點に於いて依然として克服されないと云ふこと。²⁵⁾

吾々はこの引用文を手がかりとして、經濟學に於ける歴史主義の様相を語らなければならない。經濟學に於ける歴史主義の端初が、先述のモエーゼル、フイヒテ、浪漫主義者の先驅は別として、フリードリツヒ・リストであることはこゝに説くまでもない。またドイツに於ける新しい歴史學の方法の訓練の下に歴史法學の影響を受けて體系的に問題を提出した人がロツシャーであることも餘りにも有名である。人はロツシャーによつて書かれた「歴史學派の宣言」を讀まるべきである。²⁶⁾こゝには彼と並んで更に理論的に深く問題を扱へようとしたカール・クニースのテーゼを擧げておかう。彼は自然主義の經濟學を「絕對主義」(Absolutismus)として斥けて次のやうに宣言した。²⁷⁾

「理論の絕對主義に對立して、政治經濟學の歴史的把握(Historische Auffassung)は次の根本命題に基いてゐる。——政治經濟學の理論と云ふものも經濟生活——それがどんな形式と形態とに於いてあらうとも——と同じやうに、それが如何なる議論をなし又如何なる結論を持つてゐるにもせよ、歴史的なる發展の一つの結果であると云ふこと、それが人類的および民族的なる時代と生き生きと結びついてゐて、時間・空間・國民性と云ふ諸條件と共にまたそれらの諸條件から發生し、それらと共に存立し、

24) WL. S. 148 (同書 p. 13).

25) WL. SS. 186, 187 (同書 p. 68).

26) 邦譯「ロツシャー國家經濟學講義要綱」(岩波文庫)序文
27) 拙稿「カール・クニースの國民經濟學」(本誌第41卷第3號)はこの人の根本思想について論じてある。

また更に次の發展へとつづいて形成されてゆくものであると云ふこと、それが歴史的に於いてその議論の源を持ち、その結論に對しては歴史的なる解決と云ふ性格をば與へずにはおかないと云ふこと、國民經濟學の『一般法則』と云ふものも亦、他ならぬ眞理の歴史的なる展開と前進的なる顯現とを現すに過ぎず、各々の段階に於いて、發展のある一定の點までは認識されてを眞理の一般化として存在するのであつて、その總數から見てもその形式化と云ふ點から云つても、無條件に完結してゐるとは説明されえないものであると云ふこと、而して、歴史的發展の一つの段階に於いて妥當性を與へられたところの理論の絕對主義と云ふもの自體がその時代の子としてのみ存在するのであつて、政治經濟學の歴史的發展に於ける一定の時代を示してゐるのであると云ふこと。²⁸⁾

吾々は此表現の中に歴史主義が自然主義に對して持つてゐる優越を、方法的意識の深まりを讀み取らなくてはならないであらう。吾々はまた同時にウェーバーがクニースに學んだ「歴史學派の門弟」であつたことを今想起すべきであらう。實にウェーバーは歴史主義の理念を受けて立つた人であつた。にも拘らず彼は、先の引用句が示してゐるやうに、歴史學派のよつては「自然主義」の抽象性は克服されず、科學の認識の客觀性には毫も得るところがなかつたことを、指摘しなければならなかつたのである。何故であつたか。吾々はこゝに歴史學派に於ける三立言部門の聯關を一般的に示しておきたい。歴史主義の要望を擔つて人々が營んだ研究は次のものであつた。

——彼等の中心概念は、經濟的實在が具體的には歴史的に生成する國民文化の一側面であると云ふこと、従つて經濟學の中心概念は國民經濟であると云ふことである。而してこの國民經濟が資本主義的國民經濟に他ならないと云ふことは彼等には自明のことであつた。而してかゝる國民經濟の實現を圖り（舊歴史學派）、あるひは存續、維持を意慾する（新歴史學派）ところに彼等の認識の課題は置かれたのである。従つてこゝから彼等の研究部門は分たれて来る。國民經濟が歴史的に生成したるものであるがゆゑに經濟史の研究は新しい方法の下で著しく發展

28) K. Kries: Die Politische Oekonomie vom Geschichtlichen Standpunkte (1883) SS. 24, 25.

し、「發展法則」が認識されうると考へられた。又國民經濟の實現のために國民的統一を破らうとするものを排撃し、あるひは、國民經濟より生ずる諸々の摩擦を國民的エトスによつて調停することに、政策の目標は立てられた。^(註)けれども對象が資本主義的國民經濟であつたがゆゑに、國民經濟の構造分析に用ひられたのは資本主義社會の分析の武器であつた。即ち理論としては本質的には「抽象學派」と同じ「自然法則」を求め、方法的には自然主義のメハニスムスに代るにオルガニスムスの抽象を以て「發展法則」をつけ加へることだけが問題であつた。即ち歴史と政策とに關しては國民の立場から新しい實りを齎し、意義ある試みを遺しはしたが、理論に對する本質的な寄與はなされなかつた。だから歴史學派の努力にも拘らず、或は——皮肉なことに——その努力のために却つて、克服さるべき抽象理論が經濟學の内部に横行すると云ふ結果を招いたのである。方法論論争は此事態の下にあつて精密なる一人の理論家によつて惹起された此事態の持つ矛盾の自己顯現に他ならない。

〔註〕 シュモラーの倫理的經濟學の基礎理論については、拙稿『所謂倫理的經濟學に於ける人間學』(本誌第四十五卷第三號)を參照せられたい。

C ウェーバーとデイルタイ

これまで略述し來つた自然主義から生じた抽象理論と歴史主義の理論との鬭争を調停し綜合しようとするところに、ウェーバーの問題の歴史的な取り上げ方がある。問題のこの取り上げ方がまたデイルタイのそれでもあつたことを、吾々は次に示さなくてはならない。

デイルタイによれば、歴史的意識は「ドイツ精神の最大の寶」(das grösste Gut des deutschen Geistes)である。⁽²⁹⁾而し

マックス・ウェーバーと十九世紀の方法的意識

第五十卷 五一九 第四號 一一七

て十九世紀に於けるその勃興については既にのべられた。實際、デイルタイによれば、此勃興とともに生じた廣義の歴史學派によつて始めて、形而上學や自然認識に隸屬してゐた精神諸科學はそれから解放されたのであつた。けれどもデイルタイも亦、歴史學派がそれ自身の内に持つてゐた制限を見逃さなかつた。彼は極めて適切に次のやうに書いてゐる。「歴史學派の歴史的研究および評價には意識の事實の分析との聯關が、従つて唯一の究極的に確實なる知識への基礎づけが、つづめて云へば哲學的な基礎づけが缺けてゐた。……だからそれは明瞭な方法 (eine erkennende Methode) には達しなかつた。また實際歴史的直觀と比較的態度だけでは精神諸科學の自立的な聯關を設立することもできず、また生に對して影響を及ぼすこともできなかつた。そこにあるのは「一層生き／＼し一層深くはあるが展開されもせず根據づけられもしなかつた一つの考への、貧しく低級ではあるとは云へ分析を支配した考へに對する無効な抵抗」に過ぎなかつた、と。この言葉もまた歴史學派の内部から起つた鋭い自己批判の聲として聽かれなければならない。こゝに於いてかデイルタイの終生の課題が「精神諸科學のこの態度に感ずるところあつて、歴史學派の原理と現在それによつて徹底的に規定されてゐる社會諸科學の勞作とを哲學的に基礎づけ、而して此歴史學派と抽象諸理論との鬭争を調停しようとする試みが私に生じた」としたためられたのである。

ウェーバーとデイルタイとが抽象學派と歴史主義との對立の調停を意圖したところに共通の問題を持つてゐたことは、かくして明かであらう。しかし兩者の此問題に對する視角と方法とは違つてゐたと云ふことは豫め注意しておかなければならない。ウェーバーは眼前に彼のたづさはる専門領域に於ける方法的矛盾の展開を、方法論

30) derselbe: Ges. Sch. Bd. I XVI, XVII.

31) ebenda.

論争に於いて見たのである。だから方法論はメンガーの精密な理論との聯關に於いて説かれねばならなかつた。それは歴史學派の内部に於いても(例へばワグナー)支持者を見出してゐたからである。反之、ディルタイは廣く「歴史的理性の批判」(Kritik der historischen Vernunft)と云ふ視角から、即ち歴史認識の立場から問題を取り上げた。だからウェーバーでは視角が吾々に直接關係があるに對して、ディルタイに於いては廣い展望をゆるす視角があつたが、吾々の研究領域に對してはそれだけ適用に困難を伴ふと云はなければならぬ。ディルタイによつて書かれたシュモラーの『經濟原論』第一卷の批評(全集第十一卷所收)を読む人は、この人の著者に對する同情的な態度を知り、ウェーバーの態度と比較する時に此感慨を懷くであらう。更に問題を取扱ふ方法の差異に至つては Wissenschaftsphilosophie と Lebensphilosophie との對立があることは言を俟たない。此對立については後段に若干觸れられる。

今や再びウェーバーに還つて今一つの重要な契機を摘出しておかなければならない。

ウェーバーは「メンガーは方法論的には徹底されてゐるのではないが、しかし非凡なる思想を開陳した」と書いてゐる。ウェーバーがメンガーに關して説くところが妙いのは「歴史學派の門弟」たることを自覺してゐた彼には當然のことでもあつたであらう。而してメンガーの方法論による精密の方法による理論も彼を賛成せしめなかつた。「この理論『抽象的』・理論的方法——出口」の創始者が初めてまた唯々一人成就したところの、法則的認識と歴史的認識との原理的、方法的區別にも拘らず、彼はこの抽象的理論の諸理説に對して實在を「法則」から演繹し、うると云ふ意味での經驗的妥當を要求した³³⁾と云ふ時、ウェーバーのメンガーに對する不満は明瞭に現れてゐる。

32) WL. S. 373 Anmerk.

33) WL. SS. 187, 188. (同書 p. 73).

又メンガーの理論の影響の下に、經濟學に心理學的基礎づけが要望せられ經濟學が應用心理學であるかのやうに（ワグナー）考へられたり、更に廣く經濟學や歴史學に必要な基礎學科は心理學であると考へ始められたために、ウェーバーは此心理主義一般を「人間中心的」立場として之に對立した。³⁴⁾例へばミュンスターベルヒ、ゴットル、而してデイルタイも亦、その立場に立つものとされた。而してウェーバーによれば方法論は認識の心理的起源や敘述の形式を問ふことではなく、認識の論理的構造を明かにすることで行なければならなかつた。³⁵⁾即ち彼は心理主義に對して論理主義の立場から方法論を建設しようとしたのである。さて吾々はウェーバーの此立場を明示してゐる次の言葉で以て、問題を提起するこの節を終へようと思ふ。

『心理主義』(Psychologismus) 即ちここでは『世界觀』であり又、それを創らうと云ふ心理學の假稱は、一方では『自然主義』——力學に基かうと生物學に基かうと——と、他方には『文化史』に基く『歴史主義』と全く同様に、無意味であり、又經驗科學にとつて全く同様に危險なものである。³⁶⁾

附記 本稿は『理想型理論的方法的意識』と名づけらるべき研究の最初の部分である。此研究はつづいて現れる二つの部分を以て完結するであらう。

34) WL. S. 82.
35) WL. S. 278.
36) WL. S. 63.